

鬼北町立広見中学校

道徳通信

道徳主任 酒井 智有

NO. 88

令和8年9月10日発行

よりよく生きる

独立行政法人国立青少年教育振興機構から、子どもゆめ基金10周年記念として、過去に学校に送られた「かがやく先輩からのメッセージ」は、子どもたちに向けて送られたメッセージをまとめたものですが、非常によい内容ですので紹介します。

「かがやく先輩からのメッセージ」 上野 由岐子(うえの ゆきこ)

小学校には、毎朝早く登校していました。なぜなら、朝礼が始まるまで友達とサッカーをしたいから。休み時間にはドッジボール。学校には、遊びに行っている感覚でした。学校から帰ると、ランドセルを放り投げてまた外へ。一輪車に乗ったり、川でタニシをとったり。男の子と一緒に遊んで遊ぶ、活発な子どもでした。休みの日は家族で出かけることが多かったですね。「困ったことがあったらお父さんに言おう」と思っていたほど、父は優しい存在でした。母もいつも自分を守ってくれている感じがあって、怒られても「心配してくれているからだ」ということが分かるんです。「何があっても、お母さんは味方だから」と言ってくれたときはうれしかったし、「母の言う通りにしていれば大丈夫」という絶対的な信頼もありました。



小学校3年生の時、友達に誘われてソフトボールチームに入りました。女の子は私一人でしたが、友達と一緒に遊べる場ができたようでうれしかったです。「今日、何して遊ぼうかな」と考えなくてもよくなったのですから。ピッチャーをやることになりました。最初はまったく上手ではなく、試合から外されることもよくありました。「うまくなりたい」よりも「楽しい」から続けていました。中学では、迷わずソフトボール部に入部。先生はとても熱心で、練習は厳しく、毎日筋肉痛でした。でも、あの頃があったから今に通じる基礎体力がついたと思うと、先生にはとても感謝しています。3年生になる頃、ソフトボールが正式にオリンピック種目になりました。夢は「オリンピックで金メダル」に。それから、「もっとうまくなりたい、試合に勝ちたい」という目標が生まれました。中学生大会で日本一になった時も、不思議とうれし涙はでませんでした。「もっと上を目指したい」と思っていたからだと思います。

「やればできる」。ずっと私を支えていた言葉です。

鉄棒で逆上がりがなかなかできない時期がありました。でも自分は、「ずっとできないままかもしれない」とは思わなかった。皆ができているのに自分にできないはずがないと根拠なく思っていたし、できないことが嫌なら「できるようになるまでやる」だけ。逆上がりは「自主練」の結果、できるようになりました。「諦めなければ夢は叶う」というカッコイイことでもなく、自分はもっと単純に物事を考えていたと思います。ソフトボールを「やめようかな」と何度も思いましたが、それでもやめなかったのは、「オリンピックに出たい。やればできる」と本気で思い込んでいたから。自分で自分を信じることであれば、できないことはないと思います。

小・中学生は、一番なんでもできる時期なので、いろんなことに挑戦してほしいですね。夢を見つけた人は諦めずに頑張してほしい。夢が見つからない人は、大事なものは夢を見つけることではなく、いろんなことに好奇心をもって挑戦していくこと。その中で、「自分だけの何か」が見つかるのだと思います。